

何かに夢中って
素晴らしい!!

シャカリキ

瓦版

VOL.6

2014年3月

【シャカリキ】[名][形動]夢中になって何かに取り組むこと。お釈迦様が人々の幸せのために力の限りを尽くしたことから、このような姿を「お釈迦様の力=釈迦力」というようになりました。



妙見山法得寺

〒546-0012 大阪市東住吉区中野4-5-26
Tel.06-6702-7373 Fax.06-6700-6002
e-mail: houtokuji@houtokuji.net

永代供養専用ダイヤル Tel.06-4302-4194 (よくよう)

ホームページ <http://www.houtokuji.net>

70回目のご命日

「水兵が今は僧なり 終戦日」

かわいきよし作(竹中美由幾さんのお父様)

この終戦日直前の4月7日。この日は住職の胸の奥深くに刻まれた日です。毎年、駆逐艦「浜風」戦没者慰霊法要が行われてきましたが、高齢化とともに、いよいよ参加出来る方がほとんど居なくなり、今年**は4月1日に、法得寺の法要の中で執り行われます。**その日がどんな日であったのか、住職の手記(昭和61年記す)から抜粋させていただきます。

…200機、300機と次々に来襲する敵機の爆音、更に急降下、急上昇する毎に耳をつんざくばかりの轟音が入り乱れ、筆舌には尽くしがたい…

戦闘開始後、間もなく「浜風」の後甲板に大型爆弾が命中し戦友が吹っ飛んだ。…艦尾は半分以上も切断され、航行不能…続いて魚雷が左舷缶室(ボイラー室)に命中し缶が爆発。大きな火柱が立ち、すさまじい勢いで蒸気が噴き出し、実に悲惨な光景であった。

「浜風」は三つに折れ、右に大きく傾き、瞬く間に海水が足元に押し寄せて来た。「総員退去」の号令により、皆次々と海中に飛び込んでいく。渦に巻き込まれてはいけないと思い、夢中で百メートル位泳いで後方を振り返ると、艦尾は既に沈み貝の付着した赤錆びた艦底が徐々に露出して、艦首

が垂直になった瞬間、急速に海中に没してしまった。ああ、もう再び「浜風」の雄姿を見る事は出来ない…

前方を見ると応急用資材の角柱が流れており、必死で泳ぎ着き、それにつかまり、ほっと一息ついた。波が来ると息を止めて浮上し海水を吞まないように心掛けた。

何時間位経過したであろうか、味方の砲声は全く聞こえない。上空を旋回していた敵機は浮流している我々に、機上より身を乗り出し銃撃、機銃掃射等の攻撃を加えて来た。そのつど海中にもぐり、浮上しては流れ去った角材まで泳ぎ着き、やっとつかまったら容赦なく機銃弾が飛んで来る、また海中にもぐる…この繰り返しであった。

4月7日といえはまだ海水は冷たく、時間がたつにつれ寒さが身にしみ歯の根も合わず、がくがく震え

て満足な言葉にならなかった。海面は重油で汚れ悪臭を放ち、種々の浮流物が散乱している。元気で浮いている者もいれば、ひどい火傷を負っている友もいる。重傷にも負けず気力で頑張っている先輩もいた。機銃弾が命中して何人かの戦友が死んでいった。正に生地獄の様相である。

同年兵の古川君は弾薬箱につかまり、すぐ近くに浮いていた。互いに励まし合って来たが、かなり海水を吞んだようでだんだん息苦しくなっていくのがわかった。疲労も極度に達し、遂には力尽きて海中に沈んでいった。その姿を目前にしながら助けてやる術もなく、実につらい悲しい戦友との別れであった。自分もあと何時間かたてば彼と同じ運命をたどる事になるだろうと思うと、急に気持ちの張りがなくなり淋しくなってきた…

やがて夕暮れが迫り、敵機も退去した。海上がやや薄暗くなった頃、はるか彼方に一隻の艦影が目映った。こちらに直進して来る。間もなく味方の駆逐艦と確認出来た。正に感激の一瞬であった。「初霜」が私達の救助の為に来てくれたのである…

戦後69年の歳月は、人々の記憶から遠く薄れて、体験を語り継げる人もほとんど居なくなりました。法得寺では、国のために戦い、尊い命を犠牲にされた御霊に対して、哀悼の誠を捧げるとともに、戦争は、決して繰り返してはならないという願いを込めて、「戦没者慰霊法要」を引き継いでまいります。

「戦艦大和」を中心として
10隻で「沖縄海上特攻隊」編成

●1945(昭20)3.28
駆逐艦「浜風」呉軍港出港

●1945(昭20)4.6
午後3:20「海上特攻隊」徳山沖出撃
午後6:00「海上特攻隊」豊後水道南下

●1945(昭20)4.7

午後12:10 戦闘開始
午後12:48 「浜風」沈没
(戦死者100名、戦傷者45名)

午後2:23 「大和」沈没
午後2:50 駆逐隊司令官吉田大佐の指示信号発令
「極力生存者を救助せよ

人員を救助して再起を図らんとす」
午後4:39 連合艦隊より沖縄突入作戦中止の命令